

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）

小児がん拠点病院等及び成人診療科との連携による

長期フォローアップ体制の構築のための研究

分担研究報告書

「当院での長期フォローアップ外来での二次がんスクリーニングの実施状況」

研究分担者 原 純一 大阪市立総合医療センター顧問

研究要旨：COG ガイドラインで乳がん和大腸がん検診を推奨されている症例は、当院の長期フォローアップ外来受診中の518名中、それぞれ7名(1.3%)と12名(2.3%)であった。そのうち、検診を受けたまたは予定しているのはそれぞれ4名と7名であった。これまで乳がんの発症はないが、大腸ポリープは7名中3名で見つかった。今後対象症例が増加してくるが、丁寧な指導とフォローが重要である。

A. 研究目的

当院長期フォローアップ外来(LTFU)受診中患者のうち、乳がん、大腸がんの二次がんスクリーニング対象患者を抽出し、スクリーニングの実施状況と調査する。

B. 研究方法

LTFU 受診中の小児がん経験者を対象としてCOGガイドラインに従い、乳がん、大腸がんの二次がんスクリーニング対象者を抽出した。抽出された対象者のスクリーニング状況を調査した。

C. 研究結果

受診中患者のうち、発症から概ね5年以上を経過し、当院を継続受診中の患者518名であった。

518名の背景は以下の通りである。性別：男性285名、女性233名、年齢：4-51歳（中央値13年）、治療終了からの年数：2-49年（中央値13年）、疾患：血液腫瘍284名(55%)、固形腫瘍114名(22%)、脳脊髄腫瘍93名(18%)、非悪性血液疾患（同

種移植後など）27名(5%)

乳がんスクリーニング対象患者（乳腺への放射線照射歴がある、またはBRCA遺伝子以上があり、照射終了後8年または25歳に到達のどちらか遅い方）は7名であった。調査時点の年齢中央値31歳（28-39歳）で照射理由は造血幹細胞移植前処置が5名、固形腫瘍に対する局所照射が2名であった。7名のうち、スクリーニング実施済みまたは予定が決まっているものは4名であった。2名は受診を勧奨しているが多忙などの理由により未検診が2名、不明が1名であった。検査方法は4名全例が乳腺エコーであり、乳がんと診断されたものはいない。

大腸がんスクリーニング対象患者（腹部への放射線照射歴がある、または家族性大腸がんを示唆する場合や、炎症性腸疾患・消化性潰瘍の既往がある場合で、照射終了後5年または30歳に到達のどちらか遅い方）は12名であった。調査時点の年齢中央値33歳（30-41歳）で照射理由は造血幹細胞移植前処置が6名、全脊髄照

射 2 名、固形腫瘍に対する局所照射が 4 名であった。12 名のうち、スクリーニング実施済みまたは予定が決まっているものは 7 名であった。検診方法は内視鏡が 4 名、便潜血が 3 目で、7 名中 3 名で良性のポリープが見つかった。1 名は家族性ポリポーシスが疑われる。検診を受けていない 5 名中 3 名では、調査時点では検診の案内が未実施であった。

上記の検診受診者のうち、職域検診は 2 名で残りのほとんどは当院で検診を受けていた。

D. 考察

COG のガイドラインで具体的ながん検診が推奨されている乳がんと大腸がん検診の受診状況について調査した。それぞれ対象となったのは、対象とした 518 名中それぞれ 1.3%、2.3%と少数であったが、今後検診の対象年齢に到達する患者数が増加することでその実数は次第に増加してくることが予想される。

今回の対象には含まれていないが、当科ではLTFU患者の中で大腸がんや乳がんの発症を経験していることから、対象となる患者には検診受診を強く勧めている。しかし、今回の調査で明らかになったように推奨にもかかわらず受診に積極的ではない患者が一定割合存在する。このような患者には、セルフチェックの重要性

の指導などを含め、丁寧にフォローしていくこととしている。

E. 結論

乳がんと大腸がんのハイリスク例のがん検診受診状況について調査を行った。今後、対象症例は増加していくことが予想され、救える命を救うため、検診の重要性の指導などの丁寧なフォローが必要である。

F. 健康危険情報

(分担研究報告書には記入せずに、総括研究報告書にまとめて記入)

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他